

E 5 老年期における配偶者選択  
福岡教育大 高橋久美子

目的 高齢化社会において老年期の主体的な生き方が模索されている。まだ少数例ではあるが、近年、配偶者となるために積極的に行動する老人たちが現われてきた。その数は今後次第に増加すると思われる。だが一方では、老人の結婚に対しては社会的に依然として根深い偏見があり、その実現には子どもとの関係など解決すべき問題も多い。さらに、老人の結婚においては一般に生殖が目的とされないので、結婚に対する考え方も若い世代とは異なることが予想される。そこで本研究では、老年期における配偶者選択の行動と意識の実態を把握し、その特徴や問題点を明らかにすることを課題とした。

方法 全国15ヶ所に支部があり、男性55歳以上と女性50歳以上を会員資格の要件とする茶のみ友達相談所〈無限の会〉の会員を対象として、東京・大阪・京都・福岡の4地域で昭和59年10～12月に調査を行なった。全部で495部の調査用紙を配布、253部を回収した。分析対象数は78人、53人、51人、49人で、男女比は合計で129人対101人である。

結果 単独世帯が過半数を占めているが、子どもと同居している場合でも大多數の者が程度の差はあれ孤独感を抱き、性的欲求がある者が女性でも6割を越えているなど、孤独感と性的欲求は結婚志向を強める大きな要因となっている。予想に反して、子どもがいる男性の半数が入籍同居型の結婚を望み、子どもがいる女性の半数までが内縁別居型の結婚という、不安定だが拘束されない自由な関係を望んでいる。子供に結婚を反対されても自分の意思を通すと考えている者は男性が5割に対して女性は3割と少なく、結婚後の親族交際に関して、女性はとくに結婚を個人的な専断として捉える意識が強い。